

鹿児島県大隅半島内之浦方言における

二型アクセントの痕跡¹

高城隆一

taki.ryuichi.0816@gmail.com

キーワード：鹿児島方言 内之浦方言 音韻論 二型アクセント

要旨

本稿では、先行研究によって「一型アクセント」であるとされてきた鹿児島県の大隅半島東部で話されている内之浦方言のアクセント体系を記述し、二型アクセントの痕跡が今なお残存することを指摘する。拡張語を2つ以上使用した文中での名詞の発音を観察すると、ある話者の発音では鹿児島市方言の二型アクセントと類似する、対立する2種類のアクセント型が現れることから、この話者が鹿児島市方言と同じ二型アクセントに近い体系を意識下に持っていると考えられる。さらに、拡張語を単独で発音した際にはアクセント型の対立が見られない別の話者も、文中での発音においては2種類のアクセント型が比較的安定して現れることが明らかになった。両話者の体系にはそれぞれ鹿児島市方言とのアクセント型の対応や語末音素による条件づけが想定でき、これは二型アクセントから変化したものであると考えられる。

1. はじめに

本稿では、鹿児島県^{きもとつぎくんきもつぎちやう}肝属郡^{うちのうらちやう}肝付町内の旧内之浦町中心部(図1)²の伝統方言(以下、内之浦方言)のアクセント体系に、二型アクセントの痕跡が見られることを報告する。旧内之浦町は、鹿児島市からフェリーと車で南東に約2時間30分、80kmほど離れた大隅半島東岸^{おおすみ}に位置しており、北から順に^{きたかた}北方、^{みなみかた}南方、^{きしら}岸良の3地域に分かれる。鉄道や高速道路はなく、バスの本数も限られており、現地への移動は車が最も効率的である。平成17年に旧高山町^{こうやまちやう}と合併し肝付町となったことで、自治体としての内之浦町は消滅した。肝付町の住民基本台帳人口によると、旧内之浦町地域の総人口は、過去約8年半(平成23年8月~令和2年3月)で4



図1 九州南部の地図

¹ 本研究は国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本の危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」および、JSPS 科研費 17H02332、20J22969 の助成を受けたものである。長時間の調査にご協力いただいた内之浦の皆様にご挨拶申し上げます。また、方言話者の方々をご紹介くださった肝付町教育委員会と肝付町シルバー人材センターの方々や、本文中で言及する根占と佐多を含む、内之浦以外の地域の方々にも調査にご協力いただいた。本稿の内容については以下の方々から貴重なご意見および情報をいただいた：青井隼人、梅谷博之、中澤光平、平田秀、松倉昂平(敬称略)。

² 図1に示した地名のうち、根占と佐多については13頁の4.2.1節で言及する。

分の3以下に減少している。さらに、令和2年3月末現在の総人口2,945人の内53.5%が65歳以上であり、平均年齢は61.72歳である。国内の多くの伝統方言と同様に年齢が下がるほど継承者は少なく、若年層にはほとんど引き継がれていない。

従来、内之浦方言のアクセント体系は、「一型アクセント」であるとされてきた(2節で詳述する)。しかし、筆者による名詞・動詞・形容詞のアクセント調査では、品詞の別にかかわらず、先行研究で報告されているような体系は確認できなかった。本稿では、拡張語(=語+0個以上の接語)³を2つ以上使用して作成した短文中において、2種類のアクセント型が実現することを報告する。任意の語に実現するアクセント型が比較的安定しており、類別語彙や鹿児島市方言との対応関係が一定程度認められる。これを基に、内之浦方言のアクセント体系に二型アクセントの痕跡が認められることを示す。

ここで、本稿で用いる用語を導入する。まず、アクセント型が実現する領域を「アクセント単位」と呼ぶ。内之浦方言では、原則として拡張語がアクセント単位である。次に、鹿児島市方言の二型アクセント(平山1951、木部2000など)の記述に倣い、(1a)⁴のようにアクセント単位の次末音節のみが高い型を「A型」、(1b)のように最終音節のみが高い型を「B型」と呼ぶことにする。なお、これらは本稿においては音調の実現形を指示するために用いるものであり、体系内において型の対立があることは必ずしも含意しない。

- (1) a. A型 : $\bar{\circ}$ 、 $\bar{\circ}\circ$ 、 $\circ\bar{\circ}\circ$ 、 $\circ\circ\bar{\circ}\circ$
 b. B型 : $\bar{\circ}$ 、 $\circ\bar{\circ}$ 、 $\circ\circ\bar{\circ}$ 、 $\circ\circ\circ\bar{\circ}$

以下、2節では内之浦方言のアクセントに関する先行研究を整理する。3節では筆者による調査の概要を示し、4節ではその結果を提示し検討する。5節は結論である。

2. 先行研究

平山(1951)、上村(1969)、後藤(1983)、藤原(1986)に内之浦方言のアクセントに関する記述が見られる。このうち、語例とアクセント型の実現形の提示のみで、分析が提示されていない藤原(1986)以外では、一型アクセントが観察されたことが述べられている。以下では、上記の先行研究を古いものから順に参照する。

³ 下地(2018)で用いられている用語である。区別が必要な場合には、接語を1つも含まない拡張語を「単独形」と呼ぶ。なお、橋本(1948:6)が「文を実際の言語として出来るだけ多く句切った最短一句切り」を「假に名づけてゐる」ものであるとする「文節」におおよそ一致すると考えられるが、本稿では、定義がより明確な「拡張語」を用いる。

⁴ 鹿児島市方言について木部(2000:1)を参考に筆者が作成。○は1音節を表す。1音節語A型の斜線は、音節内部での下降を表している。これが実現する理由については、木部(2000:73)が「語が1シラブルと短いため」と述べている。

2.1. 平山 (1951)

平山 (1951) は、内之浦方言が一型アクセントを持つと報告している。しかし、アクセントの実現形のデータは提示されておらず、地図上に一型アクセントであることを示す印が付けてあるのみである⁵。なお、平山 (1951:252) には、「山手方面」と「海岸方面」ではアクセント体系が異なっていたという記述もある。山手方面出身者への調査では「鹿児島式の二型音調」⁶が現れ、海岸方面出身者の発音は「全く一型音調」⁷であったとされている。平山 (1951) は、山手方面には歴史的に薩摩半島からの移住者が多かったことを指摘し、「かなり早くから一型化していたこの町に、二型音調が侵入したのかも知れない」という見解を示している。つまり平山 (1951) は、一型アクセントを内之浦方言固有の体系であると考えていたことになる。地図上に示されている一型アクセントの印は、内之浦方言のアクセント体系が、固有の体系を残している（と平山が考えた）海岸方面出身者の発音で代表されていることによる。

2.2. 上村 (1969)

上村 (1969:239) も、内之浦方言が一型アクセントを持つと報告している。(2) に当該の記述を示す。

- (2) 語頭から二番目の音節を高める。大隅東南隅の内之浦アクセントがそれ。〇〇 (〇〇), 〇〇〇, 〇〇〇〇型。ただし、一音節語・二音節語は不安定。

(上村 1969: 239)

上村 (1969: 239) では、「一型アクセント」と題された節の中で 2 種類の体系が紹介されている。このうち、内之浦方言のアクセントに関する記述は (2) に示した箇所のみである。語例は示されておらず、「語頭から二番目の音節」が存在しえない 1 音節語については、2 音節語と合わせて「不安定」と述べられているのみである。さらに、「一音節語・二音節語」が、どのように「不安定」なのかも不明である。

2.3. 後藤 (1983)

後藤 (1983: 305) も、内之浦方言が一型アクセントを持つと報告している。1 音節語と 2 音節語の語例と実現形が明示されている (表 1)。表 1 の各行において、「音節数」では名詞が単独形で発音される際の音節数、「型」では前節で紹介した鹿児島市方言のアクセント型、「鹿児島」では鹿児島市方言の語例、「内之浦」では内之浦方言の語例、「語類」では類別語彙との対応がそれぞれ示されている。

⁵ 平山 (1951) は「一型アクセント」、「無アクセント」、「曖昧アクセント」の 3 つを区別して記述している。本稿では、この分類の詳細へは立ち入らない。

⁶ 鹿児島市方言と一致していたのか、類似していただけなのかについては書かれていない。

⁷ どのような実現形を持つ「一型音調」であったのかについては書かれていない。

表 1 鹿児島市方言と内之浦方言の1・2音節名詞のアクセント（後藤 1983: 305）⁸

音節数	1		2	
型	A	B	A	B
鹿児島	エ・エガ	エ・エガ	アメ・アマガ	アマ・アメガ
内之浦	エ・エガ		アメ・アマガ	
語類	柄…・名… (第一・二類)	絵… (第三類)	飴… (第一類) 岩… (第二類)	足… (第三類) 息… (第四類) 雨… (第五類)

後藤（1983）では明言されていないが、表 1 を見ると内之浦方言では（少なくとも「エガ」「アメ」「アメガ」は）アクセント単位の次末音節のみが高い A 型のみが実現すると解釈できる。しかし、この記述は、2.2 節で見た上村（1969）の「語頭から二番目の音節を高める」、「一音節語・二音節語は不安定」という記述とは一致しない。また、3 音節以上の名詞については示されていない。

上記の 3 つの先行研究は、内之浦方言のみを対象としているのではなく、記述の中心に鹿児島市方言を据えている。そのため、内之浦方言のアクセントに関する記述の量は相対的に少ない。記述の量を増やすことと、アクセント型の実現形が研究者間で食い違っている点の解明をすることが必要である。

2.4. 藤原（1986）

内之浦方言を中心的に扱った研究である藤原（1986: 243-254）は、瀬戸口修によって昭和 55 年に実施された、旧内之浦町南方の 3 世代 3 名（69 歳、48 歳、11 歳）の話者に対する「語アクセント」の調査結果を示している。ただし、共通語形で発音されたデータが提示してあるのみであり、体系についての議論はなされていない。3 名の話者が共通語形で発音した結果を見ると、多くの語の発音が話者間でそれぞれ異なっている。しかしながら、いくつかの語については、方言形の発音が話者間で一致したことが付記されている⁹。近隣の鹿児島市方言では、(3)～(4) のように任意の同源語を方言形で発音しても共通語形で発音しても、同じアクセント型で実現する¹⁰。下記の例では、スラッシュの左側が方言形、右側が共通語形である¹¹。

⁸ 元の表は縦書き。本稿に直接関係のない枕崎と志布志のデータは除いた。鹿児島市方言に見られる 1 音節語 A 型の斜線は (1) と同じく音節内部での下降を表している。

⁹ 「岬」、「喜ぶ」、「荒い」の 3 語について、方言形では 3 名とも全て本稿における B 型で発音した旨が記載されている。ほかの語についても方言形での発音も調査したようであるが、結果は示されておらず、ほかの語の発音が方言形でどのように実現したかは不明である。

¹⁰ 木部（2000: 46）も参照。

¹¹ 語例は 1 行目に音素表記（形態素境界付き）、2 行目に音声表記（アクセント表記付き）、3 行目に形態素情報を示す。また、音節境界でのピッチの上昇を「[]」で、下降を「[]」で、音節内部での下降を「[]」で示す。特に断りのない限り以下でも同様。

(3) A 型

nat / natu	nat=ga / natu=ga	misat / misaki	misat=ga / misaki=ga
na?]] / na]tsu	nag]ga / na]tsu]ga	mi]sa ² / mi]sa]ki	mi[sag]ga / misa]ki]ga
夏	夏=NOM	岬	岬=NOM

(4) B 型

in / inu	in=ga / inu=ga	kagan / kagami	kagan=ga / kagami=ga
[in / i]nu	in]ga / inu]ga	ka]gan / kaga]mi	kagan]ga / kagami]ga
犬	犬=NOM	鏡	鏡=NOM

(いずれも筆者¹²の内省による)

一方、藤原 (1986) で示されている結果を見る限り、内之浦方言ではこのような対応関係は見られないようである。内之浦方言話者が共通語形を発音するときどのような規則が見られるか、という問いは興味深いトピックであるが、本稿では考察対象とはしない。

本節で挙げた4つの先行研究は、いずれも筆者の調査結果(4節)とは一致しない。これは、上村(1969)と後藤(1983)の間に見られるような、アクセント型の実現形の観察の不一致ではなく、体系の解釈の不一致である。

3. 調査の概要

平成30年8月～令和2年2月の1年6ヶ月の間に計9回現地を訪問し、アクセント調査として次の3種類の調査を実施した。1つ目は読み上げ調査(3.1節)、2つ目は短文調査(3.2節)、3つ目はミニマルペア調査(3.3節)である。なお、話者によっては未実施の調査もある。話者の情報と併せて、それぞれの話者に実施した調査の種類を表2に示す。「未」は当該調査を当該話者に対して実施していないことを表す。上記の3種類の調査を補強するものとして、文法調査や語彙調査などの際の発話も適宜分析に使用した。便宜上、4名とも同じ体系を持っているものと仮定して記述するが、話者ごとに違いが見つかっている現象については個別に言及する。話者について言及する際には、「話者 M01」のようにIDを用いる。

表 2 話者情報

氏名	生年	出身地	性別	ID	読み上げ	短文	ミニマルペア
牧谷フヂ	昭和10	岸良	女	M01	未	未	実施
橋野和巳	昭和16	南方	男	H01	実施	実施	実施
(匿名)	昭和22	南方	女	Y01	未	未	実施
永井孝子	昭和27	北方	女	N01	未	実施	未

¹² 平成6年生まれ。3歳から18歳まで鹿児島市内に居住。

3.1. 読み上げ調査

この調査では、調査票に共通語形で載せてある語¹³を1回ずつ¹⁴発音してもらった（発音する際に必要に応じて共通語形から方言形に変えてもらっているため、厳密には必ずしも「読み上げ」ではない）。金田一・和田（1955）「国語アクセント類別語彙表」から、名詞・動詞・形容詞を抜き出し、それぞれ拍（モーラ）数ごとに50音順に並べ替えて示した。この調査は、話者H01に実施した。以下では、各品詞の詳細を述べる。

3.1.1. 名詞

拍数ごとの語数を表3に示す。共通語形の拍数は、方言形で重要となる音節数¹⁵とは必ずしも一致しない。調査語彙の鹿児島市方言との対応を平山（1960）で確認すると、鹿児島市方言でA型の語が30語、B型の語が35語であった。表中の「A型」と「B型」は「語数」の鹿児島市方言での内訳である。

表3 名詞の調査語彙数と鹿児島市方言での内訳

品詞	拍数	語数	A型	B型
名詞	1	19	11	8
	2	26	10	16
	3	20	9	11
	計	65	30	35

各名詞について、(5)に示す5種類の拡張語¹⁶を調査した。

- (5) a. 単純語単独形
- b. 主格の「が」を付けた形
- c. 奪格の「から」を付けた形
- d. 限定の「ばかり」を付けた形
- e. その名詞を前部要素に持つ複合語単独形

調査票は、表4に示す通り、6列で構成される。1列目には漢字で表記した名詞単独形(6)を並べた。

¹³ 「雨」、「行く」、「甘い」など。

¹⁴ 話者が複数回発音した場合には、その全ての発話を記録した。

¹⁵ 東京方言が「モーラで数えて、音節でアクセントを担う」（窪田：2006：21）のに対し、内之浦方言は基本的に、「モーラではなく音節で数える」という鹿児島市方言（窪田 2006：79）と同じ特徴を持つと解釈している。

¹⁶ 各接語（いわゆる助詞）はそれぞれ、[ga]/ga/（NOM；1音節）、[kaj]/kaj/（ABL；1音節）、[bakkaj]/batkaj/（RST；2音節）と実現した。

- (6) 絵、尾、蚊、子、酢、田、血、戸、菜、名、荷、野、葉、火、日、帆、目、藻、矢、
 秋、足、飴、雨、粟、石、糸、犬、色、桶、壁、紙、皮、空、鶴、鳥、夏、庭、橋、端、
 箸、松、窓、村、山、雪、
 間、^{あいだ}小豆、苺、命、鰻、鏡、飾、烏、薬、心、印、力、剣、隣、涙、鼠、羊、袋、岬、
 都

読み間違いを防ぐため、2列目に各語の読み方を平仮名で示した。3列目から6列目には(5b-e)の形をそれぞれ示した。話者には、この表の2~6列目を1列ずつ読み上げてもらった。

表 4 名詞アクセント調査票の一部

語	読み	+が	+から	+ばかり	複合語
絵	え	絵が	絵から	絵ばかり	絵本
尾	お	尾が	尾から	尾ばかり	尾骨
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮

3.1.2. 動詞

拍数ごとの語数を表 5 に示す。平山 (1960) で確認すると、鹿児島市方言で A 型の語が 20 語、B 型の語が 20 語であった。

表 5 動詞の調査語彙数と鹿児島市方言での内訳

品詞	拍数	語数	A 型		B 型	
動詞	2	20	10	行く、売る、欠く、着る、 する、散る、鳴る、似る、 寝る、巻く	10	合う、書く、食う、来る、 立つ、出る、成る、降る、 見る、読む
	3	20	10	上がる、開ける、歌う、 通う、借りる、探す、違う、 漬ける、拾う、焼ける	10	余る、生きる、移る、思う、 曇る、過ぎる、作る、 投げる、守る、見える
	計	40	20		20	

各動詞について、(7) に示す 5 種類の形¹⁷を調査した。括弧内に示す「行く」の例では、矢印の左側が基底形、右側が表層形（音素表記と音声表記）である。

- (7) a. 非過去 (/ik-ʌ/ → /it/[iʔ] 「行く」)¹⁸

¹⁷ 使用した接辞の基底形はそれぞれ、//ʌ/ (NPST)、//ʌn/ (NEG)、//ta/ (PST)、//ʌse-/ (CAUS)、//-tjor-/ (CON) である。このうち、上付き文字で表している「連結音」の考え方は、清瀬 (1971) と黒木 (2015: 32-33) に倣っている。本書電子版所収の拙論も参照。

¹⁸ //ik-ʌ/ は連結音実現規則により /ik-u/ となり、狭母音音節の音節末子音化規則により /it/ として実現する。

- b. 否定 (/ik-^an/ → /ik-an/ [ikan] 「行かない」)
 c. 過去 (/ik-ta/ → /it-ta/ [itta] 「行った」)
 d. 使役+非過去 (/ik-^ase-^ru/ → /ik-asu-t/ [ikasu?] 「行かせる」)¹⁹
 e. 継続+非過去 (/ik-tjor-^ru/ → /it-tjot/ [itteo?] 「行っている」)²⁰

3.1.3. 形容詞

拍数ごとの語数を表 6 に示す。平山 (1960) で確認すると、鹿児島市方言で A 型の語が 5 語、B 型の語が 8 語であった。

表 6 形容詞の調査語彙数と鹿児島市方言での内訳

品詞	拍数	語数	A 型		B 型	
形容詞	2	2	0		2	無い、良い
	3	11	5	赤い、甘い、遅い、 堅い、遠い	6	青い、黒い、高い、 早い、太い、若い
	計	13	5		8	

各形容詞について、(8) に示す 4 種類の形²¹を調査した。括弧内に示す「甘い」の例では、矢印の左側が基底形、右側が表層形（音素表記と音声表記）である。

- (8) a. 非過去 (/ama-i/ → /ame/ [ame] 「甘い」)
 b. 副詞化 (/ama-u/ → /amo/ [amo] 「甘く」)
 c. 動詞語幹化+過去 (/ama-ikar-ta/ → /amekat-ta/ [amekatta] 「甘かった」)
 d. 動詞語幹化+推量 (/ama-ikar-o/ → /amekar-o/ [amekaro] 「甘いだろう」)

3.2. 短文調査

読み上げ調査で使用した名詞 65 語から 33 語を無作為に抜粋し、主格の /=ga/ を付けた形を使った短文を 2 回ずつ発音してもらった。これにより、アクセント単位である拡張語が 2 つ以上連続する環境を作った²²。この調査は、話者 H01 と話者 N01 に実施した。動詞と形容詞については実施していない。

¹⁹ /ik-^ase-^ru/ は連結音実現規則により /ik-ase-ru/ となり、狭母音音節の音節末子音化規則により /ik-ase-t/ となり、語幹末母音の交替規則により /ik-asu-t/ として実現する。

²⁰ /ik-tjor-^ru/ は連結音実現規則により /ik-tjor-u/ となり、狭母音音節の音節末子音化規則により /ik-tjot/ となり、子音の逆行同化により /it-tjot/ として実現する。それぞれの形態音韻規則の詳細については稿を改めて論じる。

²¹ 使用した接辞の基底形はそれぞれ、//i/ (NPST)、//u/ (ADV)、//-ikar-/ (VLZ)、//-ta/ (PST)、//-o/ (INFR) である。

²² 「雨が降り始めた」など。主格の /=ga/ が付いた語から始まる文を発音してもらい、発話初頭におけるアクセントを観察した。拡張語を 2 つ以上使用した句については確認できていない。

3.3. ミニマルペア調査

二型アクセントを持つ鹿児島市方言において、アクセントによってミニマルペアをなす語を10組選んだ(表7)²³。それぞれをペアにして話者に提示し、アクセントによる弁別の有無を調べた。この調査は、話者 H01、話者 Y01、話者 M01 に実施した。

表7 ミニマルペア調査で使った調査語彙

音素表記	音声表記	鹿児島市方言でのアクセント型	
		A型	B型
ame	ame	飴	雨
taj	taj	タイ(国名)	鯛
ban	ban̩	晩	番
too	to:	十	塔
ha	ha	葉	歯
go	go	五	碁
si	ei	詩	し(文字)
daj	daj	誰	台
jon-da	jonda	呼んだ	読んだ
jon+kat	jonka?	四画	読み書き

4. 調査結果と考察

調査結果を以下に示す。拡張語単独の発音と文中での発音の間で差が見られたため、両者の結果を分けて示す。話者間での差も観察された箇所については、どの話者の発音であるかについても適宜示す。

4.1. 拡張語単独での発音

はじめに、話者 H01 への一連の調査により確認できた拡張語単独での発音を、音節数別に(9)～(12)に示す²⁴。

(9) 1音節拡張語

ha

ha]] ~ [ha

葉/歯

ban

ban]] ~ [ban̩

晩/番

²³ 調査語彙の一部は、窪菌(2012)と Kubozono(2018)を参考に選定した。

²⁴ 品詞によるふるまいの違いが見つからなかったことから、調査した語彙の数が最も多かった、名詞で代表させる。

(10) 2 音節拡張語

ha=ga	ame
ha]ga ~ ha[ga	a]me ~ a[me
葉=NOM / 歯=NOM	雨 / 飴

(11) 3 音節拡張語

ha=batkaj	ame=ga	mijako
ha[bak]kaj ~ habak[kaj ~ habak[kaj]]	a[me]ga ~ ame[ga	mi[ja]ko ~ mija[ko
葉=RST / 歯=RST	雨=NOM / 飴=NOM	都

(12) 4 音節拡張語

ame=batkaj	mijako=ga	utnoura
ame[bak]kaj ~ amebak[kaj ~ amebak[kaj]]	mija[ko]ga ~ mijako[ga	udno[u]ra ~ udnou[ra
雨=RST / 飴=RST	都=NOM	内之浦 (地名)

(高城 2020 の表記を一部修正して掲載)

拡張語を単独で発音した場合には、(10) ~ (12) では音節数の多寡にかかわらず、拡張語の次末音節のみが高いアクセント型 (A 型) と、最終音節のみが高いアクセント型 (B 型) が共に現れた。1 音節語で観察された音節内部での下降を持つ型は、(9) の ha]] ~ [ha のように対となる B 型の実現形が存在するため、鹿児島市方言 (表 1) と同じく A 型であると解釈できる。同一話者による同一環境下での発話において A 型~B 型間で揺れが見られることや、3.3 節のミニマルペア調査の結果から、この環境ではアクセント型の対立が存在しないことが強く示唆される²⁵。

さらに、この方言には A 型と B 型に加えて、(11) の habak[kaj]] のように次末音節と最終音節の間で上昇し、最終音節の内部で下降する型が存在する。ここで、この型を仮に「X 型」と呼ぶ。X 型の出現は、拡張語の最終音節が閉音節である場合で、かつ音節末子音が /n, j/ のいずれかである場合にのみ観察できている。本稿では、この X 型を A 型の変種であると解釈する。仮にピッチの「上がり目」の有無と位置に注目すると、A 型では次末音節の直前に存在し、B 型と X 型では最終音節の直前に存在する。つまり、A 型は「次末音節のみが高い型」であり、B 型と X 型は「最終音節のみが高い型 (最終音節内での下降の有無は問わない)」であると捉えることができる。一方で、ピッチの「下がり目」の有無と位置に注目すると、A 型には次末音節と最終音節の間に、X 型には次末モーラと最終モーラの間にそれぞれ存在するが、B 型には存在しない。つまり、A 型と X 型は「下降型」であり、B 型は「非下降型」であると捉えることができる。現状では、X 型がどちらかの型の変種であるかを判断する根拠は体系の内部では見つかっていない。換言すると、現時点ではどちらであっても体系に問題は生じない。そこ

²⁵ 高城 (2020) では、この拡張語を単独で発音したときの体系が「弁別機能を持たない二型アクセント」であることを主張した。

で、本稿では X 型の所属を決定する根拠を、さしあたり類例を持つ近隣方言に求めることにする。鹿児島県トカラ列島^{たいらしま}平島方言（鹿児島郡十島村）である。木部（2000: 87-91）によると、A 型と B 型が対立するこの二型アクセントでは、数える単位が大きく揺れており、「モーラとシラブルがまったく任意に現れる」（木部 2000: 87）。(13) に木部（2000）の例を示し、それに続く木部（2000）の解説を（14）に示す。

(13) ツ[マ]ン カ ～ [ツ]マン カ（積まないか）

(14) 「積む」という語は平島方言では A 型、文末詞「か」は独立式のアクセント²⁶を持つから、ツ[マ]ン カ はモーラで数えていることになるし、[ツ]マン カ はシラブルで数えていることになる。

（いずれも木部 2000: 87）

平島方言において A 型と B 型は対立しているため、A 型の環境に出てくる「ツ[マ]ン カ」という最終音節内部で下降を持つアクセント型（本稿で「X 型」と呼んでいるもの）は、平島方言では A 型の変種であると判断できる²⁷。これに対して、「X 型」が B 型の変種であるとする報告は未見である。これらを踏まえ、内之浦方言においても暫定的に X 型を A 型の変種とみなし、両者を合わせて A 型と呼ぶ。また、これ以降、A 型のうち X 型のみを指す場合には小文字を用いて「a 型」と表記する。これにより、A 型の語には、「次末音節のみが高い型」と「次末モーラのみが高い型」の 2 種類が存在することになる²⁸。これを踏まえて、本稿では内之浦方言の A 型を「下降型」、B 型を「非下降型」と解釈する。

話者 Y01 と話者 M01 には、アクセント調査としてはミニマルペア調査のみ実施した（2 名同時に実施した）。両者の結果は、拡張語単独の環境における話者 H01 の結果と類似しており、アクセント型の対立を持っていないと考えられる。なお、この 2 名の話者に対し、音節構造を調べる目的で 2 音節～6 音節の外来語 42 語の調査を別途実施した際には、2 語（トースター、エゴイスト）を除いて全て A 型のみで発音された²⁹。A 型と B 型の対立を持つ鹿児島市方言においても、外来語の場合には「A 型語が圧倒的に多くなる」（木部 2000: 2）ことが知られており、これとの類似が指摘できる。

²⁶ 木部（2013: 13）は、「助詞・助動詞のアクセント」に「従属式」、「独立式」、「特殊式」の 3 種類があるとしている。このうち「独立式」は、「一般複合法則に従わないもの＝アクセントを持つもの」であるとされている。ここでは、「ツマン」と「カ」のそれぞれがアクセント単位を形成していると解釈できる。

²⁷ 鹿児島県薩摩半島北西部の市来・串木野方言でも、対立する A 型と B 型に加えて X 型と本稿が呼んでいるアクセント型が、A 型が予測される箇所のみに出現することがあるという（黒木 2018: 46, 48）。

²⁸ a 型の出現は上述のとおり、拡張語の最終音節が閉音節である場合で、かつ音節末子音が /n, j/ のいずれかである場合にのみ観察できている。ただし、正確な出現条件は分かっていない。a 型の存在は、内之浦方言の記述に「モーラ」の概念を導入する必要があることを示している。

²⁹ B 型が観察された 2 語のうちの 1 語（エゴイスト）には A 型との揺れが見られた。

4.2. 文中での発音

4.1 節で示したように、拡張語単独の発音では 2 種類のアクセント型が観察されるにもかかわらず、両者には対立が見られず、どちらのアクセント型でも任意に実現することが分かった。一方で、拡張語を 2 つ以上使用した短文中での発音では、単独での発音の場合と異なる傾向が観察される。

3.2 節で述べた通り、名詞に主格の /-ga/ を付けた拡張語を用いて作成した短文を 2 回ずつ発音してもらい、名詞拡張語部分のアクセント型を観察した。この環境においても、A 型と B 型の両方のアクセント型が出現した。調査した話者 2 名の結果を表 8 に示す。

表 8 文中での発音

	話者 N01	話者 H01	例 (話者 N01)
A 型 2 回、B 型 0 回	13	10	ko]ga (子が)、ni[wa]ga (庭が) など
A 型 0 回、B 型 2 回	17	19	e]ga (絵が)、iro]ga (色が) など
A 型 1 回、B 型 1 回	3	4	mo]ga ~ mo]ga (藻が) など
計	33	33	

話者 N01 の発音では、2 回とも A 型で実現したものが 33 語中 13 語、B 型で実現したものが 17 語、揺れが見られたものが 3 語であった。また、話者 H01 の発音では、2 回とも A 型で実現したものが 10 語、B 型で実現したものが 19 語、揺れが見られたものが 4 語であった。アクセント型の所属語彙は話者間で違いが見られるものの、調査した範囲内においては、先に見た拡張語単独での発音より安定しているようである。以下では、話者ごとに詳細を述べる。

4.2.1. 話者 N01 の文中での発音：鹿児島市方言二型アクセントの痕跡

話者 N01 の発音と類別語彙との対応を確認すると表 9 のような傾向が見える。この対応傾向は、二型アクセントを持つ鹿児島市方言とも一致する。2 回の発話で揺れがあった 3 語³⁰を除くと、この対応表の例外は 30 語中「酢 (1 拍 3 類)」と「端 (2 拍 1 類)」の 2 語であった。このうち B 型が予測される「酢」は、[aman]/aman/ という方言語彙で発音がなされた。この語彙は鹿児島市方言にも存在し、同方言でも A 型で実現する。また、類別語彙からは A 型が予測される「端」は、鹿児島市方言でも B 型で実現する。類別語彙との対応に加え、鹿児島市方言との対応を踏まえると、一見例外と見える「酢」と「端」も県内の方言に共通する改新であると説明できる。

³⁰ 「名 (1 拍 2 類)」、「藻 (1 拍 2 類)」、「小豆 (3 拍 2 類)」がここに当てはまる。なお、「小豆」は、調査者が A 型と B 型を発音し分けながら発音を尋ねた際に、類別語彙から予測される A 型のほうが好ましいという反応があった。

表 9 話者 N01 の発音と類別語彙の対応傾向

拍数	話者 N01 の発音	所属語彙が対応する類	語例
1	A 型	1・2 類	蚊、子、日
	B 型	3 類	絵、野、火
2	A 型	1・2 類	飴、庭、夏、橋、雪
	B 型	3・4・5 類	犬、色、空、箸、松、秋、雨
3	A 型	1・2・3 類	隣、都、間、力
	B 型	4・5・6・7 類	鏡、袋、涙、鼠、苺、菓

この話者に対しては拡張語単独の読み上げ調査やミニマルペア調査は実施していないが、33語の短文調査の結果のみに基づいて考察すると、鹿児島市方言と同じ二型アクセントに近い体系を持っているということが分かる。たしかに、同じ大隅半島内に鹿児島市方言と同じ（もしくは極めて近い）二型アクセントが存在することが、旧根占町横別府と旧佐多町伊座敷（図 1；いずれも合併により現在は南大隅町^{みなんおおすみちやう}）の方言で確認できている³¹ことを考慮すると、揺れが観察される語が 1 割弱存在していたため、これらの方言とアクセント体系が同じであるとまでは言えない。しかしながら、これほど類似した体系が鹿児島市方言と独立して形成されたとは考えにくく、話者 N01 の持つ体系は、分岐の時期は未解明ながら、鹿児島市方言の二型アクセントと共通の祖体系に遡ることができると考えられる。平山（1951: 252）が言うように「侵入した」体系である可能性も否定はできないが、いずれにしても単に「内之浦方言は一型アクセントである」とする先行研究の記述は、十分に実態を捉えたものであったとは言えない。

4.2.2. 話者 H01 の文中での発音：語末音素の影響

拡張語単独の発音ではアクセント型の対立が存在しないと考えられる話者 H01 の文中での発音にも、鹿児島市方言との対応がある程度観察できる。2 回の発音で揺れがあった 4 語³²を除くと、29 語中 21 語（上述の「端」も含む）に鹿児島市方言との対応関係が見られる。残りの 8 語のうち、予測に反して A 型で実現したものが（15）の 3 語であり、B 型で実現したものが（16）の 5 語であった。ここでは、語末の音素を太字で示す。

- (15) iro=ga sora=ga nanda=ga
i[ro]ga so[ra]ga nan[da]ga
色=NOM 空=NOM 涙=NOM

³¹ 両地点での調査では、話者 1 名ずつ（旧根占町横別府：昭和 15 年生まれの男性、旧佐多町伊座敷：昭和 8 年生まれ男性）に対する 33 語の短文調査の結果が鹿児島市方言のアクセント型（平山 1960）に一致した。

³² 「名（1 拍 2 類）」、「藻（1 拍 2 類）」、「火（1 拍 3 類）」、「小豆（3 拍 2 類）」がここに当てはまる。4 語のうち 3 語が話者 N01 と一致していること理由は不明である。

(16)	ka=ga	hi=ga	nat=ga	has=ga	jut=ga
	ka[ga	çi[ga	nag[ga	haç[ga	jug[ga
	蚊=NOM	日=NOM	夏=NOM	橋=NOM	雪=NOM

(15) と (16) の語例には、それぞれ単独形の語末音素と実現するアクセント型との間に相関が少なからず観察できる³³。A 型で実現した語の語末音素は (15) の左から /o, a, a/ であり、B 型で実現した語の語末音素は (16) の左から /a, i, t, s, t/ である。「蚊」の場合を除くと、語末音素に非狭母音を持つ語は A 型として、狭母音か子音³⁴を持つ語は B 型として実現している。一方で、予測通りの型が実現した語には、この傾向は必ずしも当てはまらない。通時的には、内之浦方言が元々鹿児島市方言と同じ二型アクセントを持っており、一部の語が語末音素に動機づけられてアクセント型を変えた可能性を想定できる。ただし、今回の 2 回の発音で安定していた語が、3 回目以降にも安定して同じアクセント型で実現するのかについては未確認である。また、世代や地域による違いについても明らかになっておらず、少なくともアクセントに関しては「内之浦方言」を代表するものとして 1 つの体系を提示することはまだできない。さらに、仮にこれらの問題が解決しても、なぜ音節末音素の影響が一部の語にしか及んでいないのかということに対する説明と、今回の調査で揺れがあった語に対する説明が必要となることは変わらない。一方で、前述の通り現代の内之浦方言のアクセント体系が鹿児島市方言の二型アクセントとの共通の祖体系から独自に発達した固有の体系であるか、平山 (1951: 252) が言うように「侵入」した体系であるか、もしくは「侵入」した体系との接触によって生まれた新しい体系であるかは不明であるものの、近隣の二型アクセント体系と何らかのかかわりを持つことは明白であろう。

共時態に視点を戻すと、4.1 節で述べた通り、話者 H01 の拡張語単独の発音では A 型と B 型の間で揺れがあり、対立は観察できない。しかし、本節で述べた通り、拡張語を 2 つ以上使用した文中での発音においては、2 つのアクセント型の間に対立が存在する可能性を指摘できる。発音回数や調査語彙数や話者数を増やしたり、発話環境を変えたり、2 つのアクセント型で実現した場合の意識調査を行ったりすることによるさらなる検証が必要である。ただし、本稿の観察の範囲のみに基づいても、現代の内之浦方言に、先行研究で報告されている一型アクセントとも、鹿児島市方言の二型アクセントとも異なる体系が存在することは明確になったと言える。

5. 結論

本稿では、先行研究によって「一型アクセント」であるとされてきた内之浦方言についての調査結果を報告した。このうち話者 N01 について、拡張語を 2 つ以上使用した文中での名詞の発音を観察すると、鹿児島市方言の二型アクセントと類似する、対立する 2 種類のアクセント型が現れ、この話者が鹿児島市方言と同じ二型アクセントに近い体系を持っているということ

³³ 中澤光平氏のご指摘による。

³⁴ 語末を含む音節末の子音については高城 (2019) を参照。ただし一部の表記は本稿のものと異なる。

が明らかになった。さらに、拡張語を単独で発音した際にはアクセント型の対立が見られない話者 H01 についても、文中での発音においては2種類のアクセント型が比較的安定して現れることを確認した。鹿児島市方言とのアクセント型の対応や語末音素による条件づけが想定できるこれらの体系は、二型アクセントから変化したものであると考えられる。

略号一覧

ABL 奪格 ADV 副詞化 CAUS 使役 CON 継続 INFR 推量 NEG 否定 NOM 主格
NPST 非過去 PST 過去 RST 限定 VLZ 動詞語幹化

[] 音声表記 // 音素表記 /// 基底形 - 接辞境界 = 接語境界 + 語幹境界

参考文献

- 藤原与一 (1986) 『九州東部域三要方言：大分県朝来方言・宮崎県村所方言・鹿児島県内之浦方言』東京：三弥井書店。
- 後藤和彦 (1983) 「鹿児島県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一 (編) 『講座方言学』9: 295-326. 東京：国書刊行会。
- 橋本進吉 (1948) 『國語法研究』, 橋本進吉博士著作集2. 東京：岩波書店。
- 平山輝男 (1951) 『九州方言音調の研究：共通語・京阪語との比較考察』東京：学界の指針社。
- 平山輝男 (編) (1960) 『全国アクセント辞典』東京：東京堂出版。
- 上村孝二 (1969) 「アクセント」九州方言学会 (編) 『九州方言の基礎的研究 改訂版』238-239. 東京：風間書房。
- 木部暢子 (2000) 『西南部九州二型アクセントの研究』東京：勉誠出版。
- 金田一春彦・和田実 (1995) 「国語アクセント類別語彙表」国語学会 (編) 『国語学辞典』994-995. 東京：東京堂出版。
- 清瀬義三郎則府 (1971) 「連結子音と連結母音と：日本語動詞無活用論」『国語学』86: 56-42.
- 窪菌晴夫 (2006) 『アクセントの法則』, 岩波科学ライブラリー118. 東京：岩波書店。
- 窪菌晴夫 (2012) 「鹿児島県甌島方言のアクセント」『音声研究』16(1): 93-104.
- Kubozono, Haruo (2018) Bilingualism and accent changes in Kagoshima Japanese. In: Haruo Kubozono and Mikio Giriko (eds.) *Tonal Change and Neutralization, Phonology and Phonetics* 27. 279-329. Berlin, Boston: De Gruyter Mouton.
- 黒木邦彦 (2015) 「音韻規則」窪菌晴夫 (監修) 森勇太・平塚雄亮・黒木邦彦 (編) 『甌島里方言記述文法書 改訂版』, 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 連携研究「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」サブプロジェクト「鹿児島県甌島の限界集落における絶滅危機方言のアクセント調査研究」. 30-49. 東京：国立国語研究所。
- 黒木邦彦 (2018) 「市来・串木野方言の静態化体系」岡崎友子・衣畑智秀・藤本真理子・森勇太 (編) 『バリエーションの中の日本語史』29-41. 東京：くろしお出版。
- 下地理則 (2018) 『南琉球宮古語伊良部島方言』, シリーズ記述文法1. 東京：くろしお出版。

高城 隆一

高城隆一（2019）「鹿児島県肝付町内之浦方言の音節末摩擦音」『東京大学言語学論集』
41(eTULIP): e85–e95.

高城隆一（2020）「弁別機能を持たない二型アクセント：鹿児島県大隅半島内之浦方言」『日本
方言研究会第110回研究発表会発表原稿集』17–24.

肝付町「住民基本台帳人口」<https://kimotsuki-town.jp/chosei/tokei/2098.html> [令和2年4月アクセス] .

Traces of a Two-Pattern Accent System in the Uchinoura Dialect of Kagoshima Japanese

TAKI Ryuichi

taki.ryuichi.0816@gmail.com

Keywords: Kagoshima Japanese, Uchinoura dialect, phonology, two-pattern accent

Abstract

In this paper, I report that the Uchinoura dialect, which is spoken in the Osumi Peninsula of Kagoshima Prefecture, and known as a one-pattern accent dialect, has traces of a two-pattern accent system. Unlike central Kagoshima Japanese, the pitch patterns of the Uchinoura dialect are usually distinctive only in sentences, which contain more than one word. In this syntactic environment, I found correspondences between the Uchinoura dialect and central Kagoshima Japanese. In addition, pitch patterns are also conditioned by the word-final phonemes. It is natural to consider that the Uchinoura dialect once had a two-pattern accent system, which most other dialects spoken in Kagoshima Prefecture still have.

(たき・りゅういち 東京大学大学院／日本学術振興会特別研究員 DC／国立国語研究所)